

鷗友学園女子中学校

二〇一五年度

一次入学試験問題

【国語】 時間 50分

【校長先生からのメッセージ】

おはようございます。ゆつくり表紙を読みながら、心を静めてください。
まもなく一時間目の「国語」の試験が始まります。
がんばってきた自分を信じ、落ち着いて問題に取り組みましょう。
あなたが、持っているすべての力を出しきることができるよう祈っています。

【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題は15ページまであります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督の先生を呼んでください。
- 3 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

寛次郎と捨吉(申吉とも呼ばれている)は石工(石を彫る職人)見習いとして働いている。申吉は寛次郎より後に入門した弟子だが、仲間が「百年に一人の逸材かもしれないねえ」と評するほどの勘の良さを持っており、二人は何かと比較されることが多かった。ある日、先輩である玄造が二人を競わせようとし、まずは寛次郎が勝負を受けることを承諾した。次の場面は玄造が申吉に勝負を持ちかけるところである。

「申吉、おめえ、寛次郎と彫りでひと勝負してみねえか」

捨吉は顔を上げた。玄造が前に立って見下ろしている。

仕事を終えた男たちが作業場を出ていく。何人かが足を止めて、こちらを見ていた。

「寛次郎はやると言っている。どうだ」

「やりません」

間髪容れずに答えた。

「そう急いで答えを出すこともないさ」玄造は捨吉の肩を叩いた。「ま、一晚なり二晩なり、考えてみるや」作業場に寛次郎の姿はなかった。

その晩は早々に離れに上がった。自分の寝床に寝転がって、暗い天井を見上げる。

勝負などだがするか、と思う。

はじめの頃はよかった。ノミを持ちだした頃は、彫っていても気分がよかった。石は従順で、彫るのも削るのも捨吉の思うままだった。石に向かえば自然に腕が動き、手が動き、体が動く。

だが、そのうちに気づいた。石は自分の思うように彫れていくのではない、石のほう彫ってくれ、彫ってくれ、とささやくのだ。捨吉の体はついその誘いに乗って、動いてしまう。逆らおうとすれば、今度は自分の内側で、得体の知れぬなにかがぬうとふくらんで、むりやり腕を動かそうとする。

その瞬間、思うのだ——ああ、こいつだ。こいつがずっと前から、おれにつきまとっている奴だ、と。

その、なにかがぬうと頭をもたげる感触が、またなんとも言えなかった。不快ではなかった。不快どころか、うつとりするほどに心地よい——だからなおさらおそろしかった。なにかがふくらみ、そこに一息にのみこまれる、その感じ。いつそのまま身をゆだねてしまえばいいと、そうすれば楽になれるのだと、どろどろした暗い声が耳もとでささやきかける——そのささやく声が、他でもない、自分の声だと気づいて、ぞっとする。

その一線の前で、いつも踏み留まる。

そこを越したら、もどれないのだと思う。だから勢いあまってふるえる腕を押さえこみ、目の前の仕事だけはなんとか形にして、上がりにする。

① 石を彫るのがおそろしいのなら、店を出ればいい。それはわかっている。だがなまじつか彫れるものだから、今更出ていく気にもなれなかった。せめて札奉公をすませるまでは、ここにいることには意味がある。手に職さえつけければ、あとはどうにか食っていける。

だが、いつまでこの状態を続けていられるか。

捨吉は片手を目の前に広げる。暗がりの中では、手のありかも見えない。

「おれに取り憑いて、一体なにがしたい」

小声でつぶやく。耳の奥で生あたたかいなにかが、ぬるりと身じろぐ気配がした。

「寛兄と腕くらべをするんだそうですね」

朝、井戸端に行くと、利助が嬉々として話しかけてきた。

しない、と言いながら捨吉は顔を洗う。

「え、でも玄造さんが」

「断った」

「どうしてです」

やりたくないからやらないだけだ。答えるほどの答えでもない。

飯場ではだれもが口をそろえて同じ話をした。勝負をしる。するといいい。なぜしない。とくに八郎がしつこかった。普段から騒

がしいのが、捨吉を見つけるたびにやってきては、同じことをくりかえす。

「おう、申吉、ばあつとやろうぜ、ばあつとな」

八郎が捨吉の背中を平手で叩き、大笑いしながら飯場を出ていく。捨吉は軽くむせた。

「なんでまたあいつは、ああ馬鹿みたいに陽気なんだ」与平があきれたような顔で八郎を見送っている。「申吉、お前も突っ張ってねえで、やってやればいいじゃないか」

「必要ありません」

「そりや、お前はそうだろうさ」

「無駄ですって、与平さん。こいつは負けんのが怖いんですよ」

小之助が飯を食いながら言う。そう思いたければ思っていればいい。

寛次郎の姿はなかった。黙って飯を食うと早々に出ていったきりだ。どこでなにをしているか知らない。面倒だがあとで探しに行つて、その気はないと言つたほうがいいだろうかと考えはじめる。そうすればさすがにこの馬鹿騒ぎもおさまるだろう。いやそれよりも、先に玄造に話を通すべきか。

大体、見習いに腕を競わせてなにが面白いのだろう。退屈しのぎなら他にいくらでもある。わざわざやる気のない人間を引きこもうという、その心持ちがわからない。

その晩もう一度、玄造をつかまえて、やる気はないと断つた。それですんだと思っていたのに、翌日の昼になって八郎がやってきて、日取りは、と言ひ出したので、捨吉は眉をひそめた。

「やらないと言つたはずです」

「あいかわらずしらせる奴だなあ」たいしてしらせてもない顔で、八郎は言った。「もう親方にも話が通つちまつてるんだ。今更やらねえってわけにもいかねえだろう。なあ、申吉」

ああ、もう面倒だ、と思う。

「……わかりました」

「ようし、そうこなくちやな。いい了見だぜ、申吉」

別に勝たねばならないわけではない。適当にやって、連中がいいと思うような結果にしてやればいい。そうすればむこうも満

足だろう。

仕事が始まるまでには、まだ時間があつた。離れへ行こうか、それとも店の外へ出ようか、考えながら廊下を進んだ。まだ作業場に入る気はない。あそこは石の気配で満ちている。それよりも日の光にあたりたかった。体がひどく冷えていた。

土間から出たところで、むかいの作業場から、寛次郎が出てくるのが見えた。夏場ほど時間があるわけでもないのに、これからまたひとりでノミを握るらしい。ご熱心なことだ。

かまわず外へ出た。

「申吉」

ふりむくと、寛次郎が立ち止まってこちらを見ていた。いつになく真顔だった。捨吉は思わずその目を見かえした。

「手加減はするなよ」

寛次郎が低い声で言った。そのままふいと顔を背けて、去っていく。

手加減？

鼻で笑って踏み出そうとして、ふと立ち止まる。

いつ以来だろう。あんなふうに人から見られたのは——まともに人を見たのは。

自分の中で、なにかがぐるりとうごめいた。

越えてやろうか、と思う。

いい機会だ。この先ずつとおびえて過ぐすくらいなら、いつそあの一線を越えてやろう。丁と出ようが半と出ようが、かまやしない。今更なにを失うものなどあるだろう。

捨吉は小さく笑った。

② 寛次郎にほだされて、ついその気になった。

要するに、魔が差したのだ。

*

その日からもう、寛次郎には申吉との勝負のことしか考えられなかった。夜も眠るに眠れず、石のことを考えているほうがまだ落ち着いた。自分でも笑えるくらいだった。勝負ひとつでこんなにも舞い上がるとは。

申吉がどう思っていたかはわからない。

いよいよ勝負のはじまるその日、仕事の引けたあと、玄造が二人を呼び、言い渡した——お題は地藏、期は次の満月の夜の更けるまで。日中はのおの仕事をすること。ただし、夜は灯りを好きに使ってかまわない。

それからは毎晩、仕事を終えると飯もそこそこに石の前に座りこんだ。作業場の東の端と西の端に分かれて、たがいの背も見えない闇の中、灯りひとつを頼りにノミを打つ。

申吉とは勝負のあいだ、一度も口をきかなかった。むこうがいつ寝て、いつ飯を食っているかも知らなかった。周りの声などもうほとんど聞こえていなかった。日が経つにつれ、昼も夜もなくなった。

手を止めるのが惜しくて、何度か飯を食いはぐれた。空腹は感じなかった。昼間なんの仕事をして、なにを話したかも覚えていなかった。自分がいつ寝ていたのかもわからない。ただもう自分の彫る石のことしか考えなかった。自分の前にある石だけを見て、自分の打つノミの音だけを聞いた。

ただ一度をのぞいては。

夜も深く更けた時刻だった。ここぞというところがうまく行って、ほっと息をついた、その一瞬の気のゆるみについて、申吉のノミの音が耳に飛びこんできた。息が止まるかと思った。寛次郎はとつさに鼻唄をうたった。ひどく調子っぱずれな音が出た。③

た。それでもかまわずうたい続けた。

鋭く短く、だが鉛のようにずしりと響く、あの音——迷いのかけらもない。なぜあんな音が出せるのだろう。寛次郎の鼻唄にあおられたように、灯りが揺れる。考えてはいけけない、と思う。考えたらしきと彫れなくなってしまう。だから考えてはいけけない。他人のノミの音にのまれてはいけけない。

終いしまの日は、満月の皓々こうこうと照る夜となった。
念には念を入れて仕上げをほどこし、ノミを置く。

——よし、これでいい。

地藏の横で、皿の灯ひが小さな音をたてて燃えている。自分でともしたはずだが、記憶きおくにない。
寛次郎は作業場の反対側へ目をやった。濃い闇みが溜たまつているだけで、申吉の姿はない。

——今、何刻頃なんどきころだろう。

ふと入口のあたりで気配がした。だれかがそこに立って、こちらの様子をうかがっていた。

「申吉は」

ひどくしわがれた声が出た。自分の声ではないように聞こえる。

「ああ——」小之助の声がかえってきた。「少し前に上がって、ふらふらと出ていきやがったかな」
「そうですか」

どこか歯切れの悪い言いかただった。が、気にはしなかった。仕事を終えたばかりで、まだそこまで頭がまわらなかった。上がったのかと聞かれたので、そうだと答えると、小之助は作業場を出ていった。

寛次郎は灯りを持って、作業場の反対側へ歩いていった。

申吉の彫り上げた地藏は、作業場の端に黒い影かげのようになってうずくまっている。暗がりに、輪郭りんかくだけが見てとれた。これが地藏だろうか。ごつごつとした無骨ぶこつな形で、どう見ても地藏には見えない。

寛次郎は灯りを近づける。

その途端とたん、ぞつとして目を剥むいた。

——なんだこれは。

心の臓を一握りに握りつぶされたような心地だった。

——なんなんだ、これは。

人の声で我にかえった。

小之助が呼んだのだろう。玄造が灯りを持ち、その後ろには親方もいた。野次馬やじうまも一緒いっしょだった。

寛次郎は立ち上がった。

「上がったそうだな、寛次郎」

答えようとしたが、声が喉のどに張りついて出てこなかった。

親方は後ろをふりむいた。

「もう片方はどこへ行った」

「へえ。申吉なら、彫り終えるなり、どっかに行っちゃいました」

「しかたのねえ奴だな」

寛次郎は申吉の油皿に火をとくと、自分の地藏のところへもどり、膝ひざを突ついて座った。

石工たちがもの言いたげな視線を向けてくる。彼らかれはすでに見くらべてきたのだろう。どちらの地藏が上か。日々その仕上がりに具合を目にしてきたのだ。

④

寛次郎は奥歯おくばを噛かみしめた。言われるまでもなかった。なにが、これでいい、だろう。情けないことこの上なかった。それから考えた。彫りの腕なら、申吉とおれとのあいだに、そこまでの差があるとは思えない。ならばこの圧倒あつうてき的な敗北感はくはくかんは、どこからやってくるのだろう。なにが申吉にはあつて、おれにはないというのか。

親方は申吉の地藏を見たあと、ふたたび寛次郎の前までもどってきた。親方についていった何人かは、まだむこうに残っていた。彼らのかわすささやき声が、ここまで聞こえてくるような気がした。

寛次郎は地面をにらんだ。彼らがなにを言いたいかわかっている。

「引き分けた」

親方が言った。寛次郎ははじめられたように顔を上げた。

「なんですって」

「引き分けた。聞こえただろう」

用はすんだとばかりに、親方は地藏じざいを顎あごでしゃくった。

「さあ、とつとと片づける。この勝負のあいだ、お前らはてんで使い物にならなかった」

「でも親方」

「なんだ寛次郎、文句でもあるのか」

「それは」寛次郎は唇を噛んだ。たとえ負け勝負だとしても、こんなのはごめんだった。こんなのは。

「親方、ですが、どう見たって申吉の地蔵のほうが――」

「寛次郎」

寛次郎は思わず体をすくめた。

「てめえの親方が信じられないと言うのなら、今すぐに荷物をまとめて、ここから出ていけ」

「……出ていきません」

「だったらつべこべ言うな。納得がいけないのなら自分の頭で考えろ。甘ったれるな」

なにも言うことができなかった。そのまま追い立てられるように、作業場から放り出された。

行くあてもなく炊事場に行くと、留吉が握り飯を用意してくれた。なにも喉を通りそうにないのを、無理に飲みこんだ。留吉は勝負の結果を聞いたそうにしていたが、気づかないふりをした。

あれで引き分けのはずがあるだろうか。

離れの一階に集まった面々は、寛次郎が通ると口をつぐんだ。気をつかわれているのだろう。よけいな気づかいだった。負けは負けだ。それはそれでいい。問題はなぜ負けたかだ。

――えい、このままじゃふんざりがつかねえ。

上がりかけた階段を下りると、気晴らしにでも出るふりをして、こっそり作業場にもどった。

作業場の中は真つ暗だった。気づかれることは承知の上で、灯をとす。寛次郎の地蔵は消えていた。申吉の地蔵もない。おそらく兄弟子たちが片づけたのだろう。外に運び出していた気配はなかったように思う。ならばと壁づたいに歩いていくと、案の定、作業場の隅のほうに地蔵が二体、並んで置かれていた。

寛次郎は地蔵の前に立った。

無意識のうちに息をひそめているのに気づいて、苦笑する。それほどの不気味さが、この地蔵にはある。

申吉の地蔵の前に片膝を突き、灯りを近づける。
賽の河原だろうか。

不気味に暗い森を背に、地蔵がひとり、微笑を浮かべながら河原にたたずんでいる。なにをしているわけでもない、地蔵はただこちらを見上げているだけなのに、下腹に奇妙な気持ち悪さを感じはじめ。目をやれば、背後の森の、荒々しく枝を絡ませた木の下には、小鬼が一匹、身をひそめるようにして、地蔵の背を見つめている。小鬼の視線に地蔵は気づいている。気づいていてなお、地蔵はこちらを見上げて微笑んでいる。なぜかこちらにもそれがわかる。

流れるような地蔵の衣文に、大地をつかむ、見るからにやわらかな足の指。杵を持つ手のわずかに浮いた小指。薄い笑いを浮かべてこちらを見上げるその表情――こちらが目をそらしたすきに、その糸のように細い目がぎよろりと動いて、婉然と微笑みそう。

耳をすませば、荒涼と吹く風の音まで聞こえてきそうだった。

けっしていい石を使っているわけではない。むしろ、悪い石だといってもいい。それでも申吉は彫り抜いている。この悪い石を、この期間で、ここまで。まるでこの石全体が、一匹の化け物のように、体を丸めてこちらをのぞきこんでくる。

――まるで、なにかに取り憑かれてもしたような。

離れを出るとき、そんな言葉を小耳にはさんだのを覚えていた。あれはこの地蔵のことを言っていたのだろうか。たしかにそうかもしれない。見知らぬ石工がなにかに取り憑かれて、気もふれんばかりになって彫り上げたのだと聞かされれば、そう信じたかもしれない。

だが、これを彫ったのは申吉だ。

寛次郎は眉を寄せ、地蔵に顔を近づけた。なにが申吉にあって、おれにはないのか。それが知りたかった。この気迫はどこからくるのだろう。申吉はなにを内に抱いているのか。なぜ奴は意固地にこの勢いを隠そうとするのか。

だが、いくら見ても、申吉がなにを考えてこの地蔵を彫ったのがわからなかった。石を彫れば、多少なりとも、彫り手の心が出るものだ。なのに、見れば見るほど、胸のあたりにもやまとした気味の悪さが降り積もっていく。なにかが猛烈な勢いで荒れ狂っているのはわかる、だのに、その轟きは膜を通したように遠い。聞き取ろうと耳をすませばますますほど、ただ静寂に押しつぶされるばかりの自分がいる。

離れて見ればまたちがうかもしれない。そう思い、立ち上がって、二、三步下がる。だがそうすると、横に並んでいる自分の地蔵が嫌でも視界に入る。申吉の地蔵とくらべると、なんと変わりばえのない地蔵だろう。寛次郎は自分の彫った地蔵をなるべく見まいとして——はたと気づいた。

寛次郎の彫ったのは素朴な地蔵だった。道端に置けば、老婆が手を合わせでもしてくれそうな、地味ではあるが、それはそれでいい顔をしている。闇の中、片頬をわずかに照らされながらも、寛次郎の地蔵は地蔵らしく、そっとこちらを見守っている。

⑤ ふとなにかが胸に落ちた。

ああ、これか、と思った。親方はこれと言っていたのかと。

地蔵という題で、申吉は地蔵を彫らなかった。地蔵という名でも、これは地蔵ではない。見るものにおぞましいとさえ思わせる、そう、これはまるで、

——牙を剥いた神だ。

(田中彩子『石の神』)

問一 ——線部①「石を彫るのがおそろしい」とありますが、申吉がそう思うのはなぜですか、説明しなさい。

問二 ——線部②「要するに、魔が差したのだ」とありますが、この時、申吉の気持ちはどのように変化しましたか。そのきっかけもふくめて説明しなさい。

問三 ——線部③「息が止まるかと思った。寛次郎はとっさに鼻唄をうたった。ひどく調子つばずれな音が出た。それでもかまわずうたい続けた」とありますが、この時の寛次郎の気持ちは、鼻唄をうたったきっかけもふくめて説明しなさい。

問四 ——線部④「寛次郎は奥歯を噛みしめた。言われるまでもなかった。なにが、これでいい、だろう」とありますが、この時の寛次郎の気持ちを説明しなさい。

問五 ——線部⑤「ふとなにかが胸に落ちた」とありますが、これはどのようなことですか。申吉と寛次郎の作った地蔵のちがいをふくめて、百二十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈A〉

何歳までを若いというのは、分野によってもいろいろあるでしょうが、私自身の体験では二十代の半ばまでです。それぐらいの年齢までにした努力とその後にした努力とは、貯蓄のされ方がまったく違うのです。

二十代の半ばまでに身につけたことは、感覚として身につきます。たとえば、あの頃読み漁っていた民俗学や宗教学の目線というのは今では息をするのと同じぐらい自然な見方となっていますし、模写した作家たちの呼吸や構成は無意識のうちに自分の文体に溶け込んでいます。今でも、その時身につけた感覚をもとにものごとを考えることは多いです。血となり、骨となっているわけです。

一方、二十代後半以降に身につけたものは、感覚ではなく、理屈のような知識として身につけています。この年齢になると心で理解するのではなく、頭でもって理解するようになるためかもしれません。ただ、発想をするとか、物をつくるというのは、とても感覚的なことです。

これはサッカーのフェイントに似ています。ドリブルをしていて敵チームのディフェンダーが現れた。その時、どういうフェイントで抜き去るかは、体に身についた感覚でやるしかありません。FCバルセロナのメッシの技は、感覚でしかないでしょう。じつくりと考えていたり、覚えたばかりのフェイントをかけたたりしては、相手を抜くことはできない。子供の頃からボール遊びをし、練習をつみ重ね、感覚が血肉化するからこそ有効なフェイントが可能になるのです。

感覚として身につけているものは無意識に体が反応するようにしてつかえます。しかし、あとから知識として身につけたものはとてもつかい勝手が悪く、あれこれとこねくりまわさなければなかなか形にならない。つまり、血となり骨となりにくいのです。だから、できるだけ若い頃からその感覚を身につける練習が必要なのです。

とはいえ、こういう話は、なかなか体験してみなければわからないことですよね。それでも、あえて書いたのは、二十代半ばまでにする努力がどれだけ大切なのかということを示していただきたかったからです。

それに、二十代後半になって、仕事がうまく回転するようになると、なかなか濫読のようなことをする時間はなくなってしま

います。私自身、恥ずかしながら今読む本は九割が仕事に必要な資料などになってしまっていて、なかなか学生時代のような幅広い読書ができません。

できる時にできるだけやる。

① こうしたことは、早いうちから意識して行なうべきだと思います。できる期間というのは、人生の中でそうそう長くはないのですから。

〈B〉

勉強というのは何かを学ぶことです。先行する人が作り上げたものをきつちりと学ぶ。そうすれば、結果として目標がかなうと考える方が多いでしょう。

たとえば日本史の研究者になりたいがために、大学の先生の教えてくれた日本史をきつちりと理解する。あるいは、よい教師になりたいから、教育学の授業で習ったことをしっかりと身につける。

高校生までは、これが勉強と呼ばれるものだったはずですが。定期試験や大学入学試験は、学校の先生が教えてくれたことをそのまま暗記すれば点数をとれますし、それでよしとされていたはずですが。もしかしたら大学においても、そのようなことが勉強とされているかもしれません。

しかし、これだけやっつけていても、社会で成功することはありません。一度勉強した後に、ある「作業」をしなければならぬのです。

② 結論から先に言えば、それは勉強で学んだものを打ち壊し、自分なりの形に構成し直すことです。あるいは、勉強で学んだものを脇にどかして、自分なりのものを構築するということです。これが社会で成功する秘訣なのです。

具体的に私自身のことを例として述べてみましょう。

私は本を書く時に、事前にいろんな勉強をします。たとえば、海外の子供兵の取材をする際は、子供兵に関する文献を読み漁ります。子供兵は男の子が多く、幼いから死を恐れず、親を殺された復讐として兵士になるケースが大半だ。手に入られる文献を片っ端から集めてそういうことを勉強してから、現地へ行きます。

そうすると、どういふことが起こるか。実は、勉強してきた内容とは違う事実が目の前に現れるのです。子供兵の半分以上は「女の子」であったり、子供兵は死ぬことを大人の兵士以上に恐れていたりと、彼らの大半が誘拐されて無理やり兵士に仕立て上げられていたりするのです。

なぜ本や論文を読んで身につけた正しいはずの知識が、現場に行った瞬間に崩壊してしまうのでしょうか？

本に書いてあった知識が間違っているわけではありません。おそらく本や論文を書いた人は、男の子の子供兵に数多く出会ってきたのでしようし、彼らは死ぬのを厭わずに戦っているのを見たのでしよう。だからこそ、本や論文にそう書いたにちがひありません。

しかし、時と場合によって起こる現象は違ってきます。また、見る人が違えば視点も違うはずで、現実というのはかならず多面的なものであり、AさんがAを見たからといってそれがすべてではない。同じ物を見てもBという現実があったり、Cという現実があったりするので、それゆえ、見る人によって目に映るものが違ってくるのです。

子供兵の話にもどして考えてみましょう。たとえ所属するのが同じ系列のゲリラ組織であっても、部隊によっては女性が多いこともあります。兵士になった理由だつてかならずしも一つとは限らず、いくつもの理由から兵士になるのが普通です。

同じゲリラ組織の子供兵を見ても、状況に応じて見えてくる現実がまったく違ってくるのが常です。ゆえに、前もって勉強によって身につけた知識は、大抵自分が見た現実の前で壊れてしまうのです。現実が多面的だというのは、こういう意味においてなのです。

(石井光太『僕らが世界に出る理由』)

問一 ― 線部①「こうしたこと」とはどのようなことですか。〈A〉全体をふまえて四十字以内で説明しなさい。

問二 ― 線部②「勉強で学んだものを打ち壊し、自分なりの形に構成し直すこと」とはどのようなことですか。筆者が「子供兵」を取材した体験をふまえて、百字以内で説明しなさい。

三 各文の ― 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 旅行に行つてエイキを養う。
- (2) ショウタイ状を送る。
- (3) 天下統一をカクサクする。
- (4) タントウ直入に言う。
- (5) 多数派にフワ雷同する。

[illegible]

このらんには
何も書かないこと

①

②

③

4

⑤

⑥

7

8

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	